

あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生の直後にHack For Japanは発足しました。今後発生しうる災害に対して過去の経験を活かすためにも、エンジニアがつながり続けるためのコミュニティとして継続しています。防災や減災、被災地の活性化や人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第77回

7年の活動を振り返る [前編]

● Hack For Japan スタッフ 鎌田 篤慎 (かまた しのり)  @4niruddha

今年で2011年3月11日から丸7年が過ぎ、東日本大震災から数えて8年目に入ります。我々、Hack For Japanはあの震災に対し、「自分たちの開発スキルを役立てたい」という開発者の想いを形にするために、そうした開発者を中心としたコミュニティとして生まれました。

本連載でも復興支援にかけるさまざまな活動を紹介してきました。月日が経つことで復興支援への関心の低下を目の当たりにすることもあれば、活動の内容自体も復興支援から防災や減災に変化してきました。その中でも我々Hack For Japanともつながりが深く、東日本大震災をきっかけにITを通じて石巻の若者が挑戦できる機会を提供しようと生まれた「イトナブ^{注1}」や、福島のことを県外に伝える活動を通じてHack For Japanとの交流を深めた「エフスタ!!^{注2}」など、いくつかの東北のコミュニティは当

時と比較すると、自走した活動に発展したり、震災当時の課題を乗り越え、未来を見据えた活動にフォーカスしたりなど、良い意味でこの7年間を経た変化を感じるようになってきました。

そうした現状をふまえて7年間を振り返ることで、8年目に入るにあたっての知見を得ようとHack For Japanの中心メンバーで集まり、振り返り会を実施しました。今回の記事では前編と後編に分けて、その内容をお伝えしたいと思います。

この7年間で感じた東北コミュニティの変化

鎌田: 毎年この連載でも紹介している、福島のIT勉強会コミュニティの「エフスタ!!」との付き合いは震災直後からです。ここ最近では原発の問題は多少語られることはありますが、前向きに未来を見据えたテーマ設定が増え、参加者も学生などの若者が多くなり、震災直後の様子からするとだいぶ変わってきた印象を抱いています。石巻から1,000人のIT技術者を輩出することを目指す「イトナブ」も、震災直後に参加していた学生が今ではコミュニティをリードしており、当時と比較するとこの7年間の変化が大きいと感じています。こういうポジティブな変化がいたるところで起きているのではないのでしょうか？

山崎: 我々のHack For Japanが震災当時に掲げたスローガンに込めたメッセージには、「リカバーするまで」という想いが込められていました(図1)。何を持ってリカバーしたと言える状態なのでしょう

注1 <http://itnav.jp/>

注2 <https://efsta.connpass.com/>

▼ 図1 Hack For Japanのスローガン



7年の活動を振り返る[前編]

Hack For Japanメンバー紹介



山崎 富美

Hack For Japan立ち上げ当時はGoogleに在籍し、東北Tech道場などにもかかわる。現在はNianticに在籍。米国から帰国したタイミングで今回の振り返り会に参加。



佐伯 幸治

Hack For Japanではコピーライティングをおもに担当。普段はフリーランスとしてWebや紙媒体の編集制作・コピーライティングに携わっている。減災インフォなども運営する。



小泉 勝志郎

震災直後は南相馬でアプリ開発者育成や「うらと海の子再生プロジェクト」にてIT関連を担当。現在はシニアの開発者育成も手がける。株式会社テセラクト代表取締役。

か？ 震災前よりここが良くなった、ここはまだまだというのがある気がします。

鎌田：確かに「エフスタ!!」の場合は福島でも郡山のほうのコミュニティで、原発により近い地域との状況は異なると思います。そうした一方で、若い世代に目を向けると石巻の「イトナブ」では、プログラミングを知らなかった学生がHack For Japanや東北Tech道場^{注3}などを通じてプログラミングを学び、今では教える側に回っています。若い世代の成長はこの7年という時間も感じさせますが、震災を乗り越えた一番の収穫と言えるかもしれません。

高橋：以前は頻繁に石巻を訪れ、彼らにプログラミングを教育していました。教える生徒数が増えたことで、講師の数が足りないというポジティブな理由なのですが、今でも定期的に石巻には訪れています。震災後に育った若い世代に講師を任せても大丈夫なところまでは来ていますね。彼ら自身でITを学ぶ独自のイベントをいたるところでやっています。

山崎：震災直後の当時はプログラムを学ぶ土壌もなく、講師もいなくて生徒もいない、何もない状態から東北Tech道場が立ち上がって、多くの子供たちがプログラミングを学び、育ってきているのはすばらしい成果ですね。

鎌田：そういう意味で東北の各地でITコミュニティができ、若い世代が育ち、それぞれが自走した活動が送れるようになったのは当時からリカバーした点として挙げられそうですね。

それぞれの役割の変化

小泉：仙台は沿岸部と比較すると被災意識が薄かったというのがあるかもしれませんが、震災直後に非常に多くのIT勉強会が行われるようになりました。しかし、現在ではその数は減っています。もっと開催されても良い気はしているのですが、復興支援に向けた活動からシニア向けのプログラミング教育にシフトしている私のように、主催者側の役割も震災当時と比較すると変化し始めているのかもしれない。

つながり始めた東北

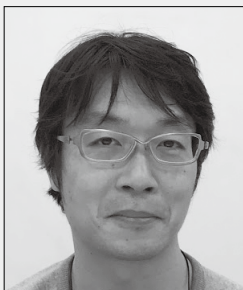
及川：震災以前は東北の各地の横のつながりは薄かったように思います。しかし、震災をきっかけに横のつながりが生まれています。たとえば、福島県南相馬市の小高で行われたハッカソンは石巻の「イトナブ」がきっかけでした。以前に東北Tech道場を南相馬で開いた際、出張講師をイトナブメンバーが務め、その取り組みがきっかけでハッカソンを開催

注3 <http://www.tohokutechdojo.org/>



高橋 憲一

震災後に立ち上がった東北Tech道場で当初から現在に至るまで講師を務める。現在は株式会社カブクに所属している。



石野 正剛

震災直後に、福島第一原発から放出される放射性物質と風向きを地図上に可視化するスマホアプリ「風@福島原発」を開発した。Increments株式会社に所属。



及川 卓也

Hack For Japanの立ち上げ後も「ITx災害」の開催や「一般社団法人情報レスキュー隊(IT DART)」の立ち上げ、代表を務める。現在はフリーランスとしてさまざまな企業の技術顧問などに従事。



鎌田 篤慎

震災当時、APIを扱う仕事に就いていたことから、国の復興支援APIへの提言や福島のITコミュニティ「エフスタ!!」のサポートなどを行う。ヤフー株式会社に所属。

するにいたっています。こうしたコミュニティ同士の横のつながりはポジティブな変化だと言えます。

山崎: その取り組みの当時は、石巻のイトナブに在籍する若い子たちが他県の東北Tech道場を手伝いたいと言い始めたことが大きかったですね。石巻で行った教育が広がりを見せ、東北の横のつながりを生んでいきました。

鎌田: 震災がきっかけだったとはいえ、若い芽が育ち、県を越えた横のつながりが生まれているのは今の東北の強みですね。こうしたことが日本全国で起きると、若者が都会に出てシャッター商店街が増え、過疎化が進むような地方の課題を解決するモデルケースになりそうなのですが、被災しなかった他県ではなかなかこのような動きが出てきていないのが現状です。

まだ復興が進んでいない地域

小泉: 復興が進んでいる一方で、まだまだ復興していない地域もあって、私は今、岩手県の大槌町というところに関わっているのですが、旧町役場がいまだに瓦礫の山なんです。役場の上にあった、津波で流された船が撤去されたのもわりと最近の話ですし、まだ列車も復旧しておらず、止まった車両がそのままになっています。そういう意味で復興といっ

ても、やはり地域の差が激しい印象を持っています。

鎌田: そういう意味で言うと、Hack For Japanでも視察に行った塩釜の浦戸諸島は当時、津波被害の爪痕が生々しく残っていましたが(写真1)。そうした過去に関わった地域が今はどのように復旧しているのか、変わったのかは、多少なりとも関わらせてもらった立場からすると気になるところです。

山崎: 震災当初、ブルドーザーの数でその地域の復興にかかる温度感というものが知れるように感じていました。その点では女川などは非常に力強かったのを覚えています。その一方で復興させるには市民が少なすぎて、かかる費用に対して割りが合わないことから、町として復旧することができないと当時言われていたところがいくつかありました。その後、どうなったのか気になります。

▼ 写真1 視察当時の浦戸諸島の様子



7年の活動を振り返る〔前編〕

鎌田：ここまでの振り返りで、人の変化と物理的な変化の話が挙がりましたが、人の変化を感じるには時間がかかりますが、物理的な変化は見てすぐに感じ取れるというのがありますね。

山崎：そうした変化の側面で言うと、女川では震災以前の地域の建物などの建設については行政だけで進めていたものが、震災以降は市民も参加した町ぐるみのものとなっていて、市民のリーダーが行政の中に入っていくなど、人の変化と物理的な変化がうまく合わさって、非常に良い取り組みが生まれています。

小泉：その女川ですが、カタールから大きな支援を受けていたことはあまり知られていません。漁業が盛んだった女川は津波被害で水産業用の冷蔵庫が流されてしまい、漁業の復興が危ぶまれていたところをカタールからの多額の資金援助により、漁業が立ち直っています。「サンマとカタール 女川つながる人々^{※4}」という映画も制作されたんですよ。あと、仙台にある起業家支援スペースもカタールからの資金援助を受けて作られています。そういう意味で、日本人はカタールからの恩をもっと知ったほうが良いと思います。

及川：女川の例で言うと、女川は町村合併の影響を受けなかったことで町内の意思統一がしやすかったという話を聞いています。確実にうまく行っている地域の特徴として言えるのは、地域の人たちが元の町を戻そうという意識よりも、新しい町を作ろうという姿勢が強く出ているのは肌で感じています。

鎌田：地元の人間ではない人が復興支援などでそうした土地に関わる際、その土地に住む人たちの事情や背景を知ったうえでコミュニケーションが取れることが望ましいですが、現実はなかなか難しいものがありました。自分自身も震災で福島県に関わりが生まれる前まで、福島の浜通り、中通り、会津といった同じ県内でも、もともと地域の人たちの感覚では別の地域という事情を知りませんでした。最初からそうした土地どちらの事情や背景を知っていれば、もっとうまくコミュニケーションが取れて、県

外から来た外部の人間という立場をうまく活かしたハブとなることで東北地方の横のつながりも、もっと早く作れたのではないかと思います。

及川：地域間のハブという側面で言えば、よりうまくやれるやり方はあったにせよ、東北Tech道場やそのほかの取り組みもある中で、東北の土地を越えたつながりを生んだ活動に我々も微力ながら貢献できていたと思います。

被災地の気持ちの変化

高橋：我々が得意とするITによる支援に関しては、一定の成果が“目に見える”形で出てきているのですが、私が石巻でいつも宿泊する旅館のご主人は「(復興は)まだまだなんだよ」とよくおっしゃるんです。具体的に何がというふうに聞いても、明確な答えがあるわけではないんですが、被災地に住む人たちの気持ちの面での回復はまだまだなんだよ、ということらしいんです。

鎌田：石巻で言うと、我々が関わっている「イトナブ」の石巻ハッカソンのほかにも最近ではさまざまなイベントが開催されて、県外からも多くの人が集まっているように感じているんですが、地元の人たちはまた違った印象を抱いているということでしょうか？

小泉：もともと地元で商売していた人たちがそうした変化の恩恵を受けていないというのはあるかと思います。たとえば、漁業、農業では震災で仕入れ先を別のところにされて、そのまま戻って来ないというのがあって、そういう意味ではイベントなどで県外から人が多く集まってきても、日常の生活で震災以前の状況に戻っていないということが、地元の人たちの間にもあるのだと思います。



この7年間の間に東北でプログラミングを学んだ若い芽が数多く育ち、次世代の若い芽を育成し、県外との横のつながりも生まれてきたポジティブな側面はありつつも、まだ被災地が抱える課題に気づかされた振り返り会の前半でした。**SD**

注4 <http://onagawamovie.com/>